

倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。主著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践をふりかえり、現代の保育観を問い直す機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

こころもち

子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である。

子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い。濃い心もち、久しい心もちは、誰でも見落とさない。かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱にいる人である。

心もちは心もちである。その原因、理由とは別のことである。ましてや、その結果とは切り離されることである。多くの人が、原因や理由をたずねて、子どもの今の心もちを共感してくれない。結果がどうなるかを問うて、今の、此の、心もちを諒察してくれない。殊に先生という人がそうだ。

その子の今の心もちにのみ、今のその子がある。